

源氏物語の世界

*A~Hは展示コーナーの棚表示に対応しています。

A 『源氏物語』注釈書のあれこれ

あこがれの『源氏物語』。いつか読んでみたいと思っただけでも、ちょっとむずかしそうで、なかなか一人では読めそうもないと感じている人は多いのではないのでしょうか。確かに現代人にとって、何の助けもなく原文を読解することは、専門の研究者であっても、たやすいことではありません。

そういう時、頼りになるのが注釈書の類です。これは本文の難解な個所に注を加え、場合によっては解釈を示した書物。最近では、一般の読者にとっても、たいへんに読みやすい注釈書が出ています。

ここではその代表的な例として、小学館 **新編日本古典文学全集『源氏物語』**を紹介します。三段組の体裁で、本文を中に、細やかな頭注と、下段には全文訳を示しており、見た目にもすっきりして、読みやすい本です。頭注と現代語訳の助力を得ながら、原文で『源氏物語』を読む楽しみを実感してみてください。



B 『源氏物語』への誘い

Aで紹介した新編日本古典文学全集の本文を、部分的に切り出して、省略部分を現代語で簡単に紹介し、わかりやすく解説したものが、同じく小学館の**日本の古典をよむ『源氏物語』上・下**です。同様の本には、角川ソフィア文庫のビギナーズ・クラシックス『源氏物語』などというものもあります。人気作品の『源氏物語』については、こういう初心者向けの本もたくさん出版されていますので、町の図書館などで探してみてください。



入門書的な書物としては、このような注釈書の類のみではなく、解説書的・評論集的な性格のものもあります。藤井貞和氏 **岩波セミナーブックス『源氏物語』**や藤本勝義氏の**『好かれる女・嫌われる女 源氏物語の恋と現代』**(新典社)など、親しみやすそうなものを紹介してみました。さらに『源氏物語』の世界を独自の視点からとらえなおし、小説や漫画などに再生した作品なども、初学者が『源氏物語』に親しむという点では有効な読書でしょう。橋本治氏の『窈窕 源氏物語』や大和和紀氏の『あさきゆめみし』などが有名ですが、ここでは小泉吉宏氏の**『まろ、ん?大掴源氏物語』**を紹介してみました。



楽しそうに思えたら、とりあえず手に取って、ザックリ目を通してみましょう。意外にハマるかも……。

C リライトとしての全訳本『源氏物語』

原文に馴染み、親しむ、という点から言えば、全訳本を読むのも効果的でしょう。『源氏物語』は人気作品ですから、古くから多くの作家によって全訳本が出されています。与謝野晶子・谷崎潤一郎・円地文子・舟橋聖一などそうそうたる大家が、この古代の長編小説の全訳に挑んでいます。

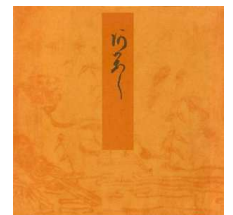
Aで紹介した小学館 **新編日本古典文学全集『源氏物語』**にも、たいへん見事な現代語訳が付されていますが、それらと、ここで採りあげた全訳本が異なっている点は、こちらの本には原文がないという点でしょう。現代人にとっては苦手意識の強い古文がないので、読みやすいという面もありますが、その分だけ訳し手の価値観・感性によって彩色される一面もあります。ここで紹介した**瀬戸内寂聴 訳『源氏物語』**などもその典型。同様に田辺聖子氏の『新 源氏物語』も、いかにも田辺聖子的世界と言えます。最近では「リンボウ先生」の愛称で知られる林望氏の『謹訳 源氏物語』もこの類でしょう。つまりその意味では、Bで採りあげた橋本治氏の『窠変 源氏物語』や大和和紀氏の『あさきゆめみし』などと同質。これらはいくまで、それぞれの作家による『源氏物語』のrewrite（リライト）であって、それをそのままオリジナルの現代語訳と同一視するのは危険なのだということを認識したうえで、「カバー作品」として楽しむことが肝要なのです。

D 本当の「原文」

「原文」という語を、「オリジナルの『源氏物語』」という意味で言うとするれば、実のところAで採りあげた注釈書の本文であっても、厳密には「原文」ではないことになります。

千年以上も昔に紫式部という女性が書いたとされる『源氏物語』の原本があったと仮定してみましょう。この自筆本を借りて読んだ人が、この作品をおもしろいと思ったとします。気に入って、手元に置きたいと考えたその人は、その自筆本をそっくり写そうとします。何しろコピーも印刷技術もない時代ですから、写そうと思えば、筆と墨を用いて、全部書き写すしかないわけです。気が遠くなるような作業ですが、人気作品だった『源氏物語』の場合、読んでファンになった読者も多く、結果的に数えきれないほどの人の手で書写されました。

何世紀もの間には、度重なる戦乱や災害に見舞われて、いつしか自筆本そのものは失われてしまいましたが、多くの「源氏ファン」によって書き写されたコピー版の方は、幸いにもその一部が残されました。こういうコピー版を**写本**（しゃほん）と言います。ここに紹介したのはその写本の一つ、**宮内庁書陵部蔵『源氏物語』**の一部分——もちろん実物ではなく「影印本」、つまりコピー本ですが——です。それに



しても限りなく優美な「ミミズのぬたくり」のようにしか見えない、これは平仮名——くわしく言えば「変体仮名の連綿体」——なのです。たいへん美しい外観ですが、読みにくいのも実際でしょう。ご覧のようにほとんど漢字書きもなく、句読点もカギかっこもないものを、現行の平仮名に直し、文意に適う漢字をあて、記号を補い、活字に直して提示しているのが、現在一般に「原文」と呼ばれているもの。つまり今日、私たちがこんなに気軽に「原文」を目にすることができるのは、多くの先人（源氏ファン）たちの努力の賜物であって、途方もなく手間暇のかかった「結果」なのだ、ということをご覚悟ください。

E 『源氏物語』の研究書

「言葉」は時代とともに移り変わります。『源氏物語』の場合も、10世紀末の話し言葉を基として書かれているわけですから、当然半世紀もすれば言葉遣いも微妙に変化してきたでしょうし、いわゆる「死語」のような表現も出てくるわけです。物語中には、同時代に流行した和歌を踏まえたような表現もたくさんあって、肝心の和歌の流行が一過的に終わってしまったような場合、意味がわからなくなってしまうこともあります。『源氏』は人気作品だっただけに、きちんと読みたいという欲求は根強かったと思われ、それに応えるべく難解な表現に解説を加えるような研究——いわゆる「注釈」という作業が早くから行われてきたのでした。

現存する最古の注釈としては、藤原伊行の『源氏釈』が知られ、平安末12世紀半ばころには成立していたとされています。ほかにも藤原定家の『奥入』、四辻善成『河海抄』、一条兼良『花鳥余情』、三条西実隆『細流抄』、北村季吟『湖月抄』など、いずれも傑出した著作で、現代の研究者にも注目されるような場合もあります。『源氏物語』を「もののあはれ」の文学と提示して見せた本居宣長の『玉の小櫛』は、よく知られていますね。

現代では、こういう注釈的研究のほかにも、実に幅広い分野にわたって、多様な研究がなされています。登場人物論、作者論、成立構想論、和歌表現との関わり、社会制度との関わり、民俗学的視座から、仏教的視座から等々、作品理解のために様々なアプローチが試みられています。

研究書ですから、一般の読者にとっては、少々「敷居が高い」と感じられるような書物かもしれません。でも、試みにパラパラと見てみると、意外におもしろそうと思える本もあるでしょう。「ものは試し」と言いますよ。

F 『源氏物語』の影響関係

『源氏物語』は、様々な先行作品からの影響を受けて創出されており、また以後の作品に多大なる影響を与えています。ここでは『源氏物語』という作品を、日本文学の流れの中に置いてとらえ返すという目的から、『源氏』以前の作品群と以後の作品群とを紹介してみました。

『源氏物語』の成立を考える時に、なくてはならぬ存在とえば、第一に和歌に対する教養でしょう。そもそも「物語が読める」ということは、「文字（少なくとも平仮名は）が読める」ということであり、同時代においてこの識字という能力は、中流以上の階層の特権と言っても過言ではないということ忘れてはなりません。そして当時の人が平仮名をどうやって習ったかと言えば、それは和歌の学びによって習得したものだったようです。平安時代の貴族にとって、『古今和歌集』によって代表される和歌の教養は、必須アイテムだったわけです。

『伊勢物語』は和歌の成立過程を物語化した歌物語。平安時代には在原業平の一代記的作品として鑑賞されてきました。同様に『土佐日記』『蜻蛉日記』は、和歌を中心に据えた歌日記。いずれも和歌が抒情の核となって、作者たちの日常雑感を、言語表現として紡いでゆく趣をもった内容です。

これらがノンフィクション的であるのに対し、読む人の空想を大いに刺激するフィクションとしてあったのが『竹取物語』『宇津保物語』などの作品です。『竹取』は、ご存知「かぐや姫」の物語で、「物語の出でき初めの親」〈『源氏物語』絵合巻〉とされる作品。『宇津保』の方は音楽の伝承をめぐる筋立てであ

り、『源氏』以前の作品としては最も長編の物語です。

もう一つ、忘れてはならない知的基盤が、『白氏文集（はくしもんじゅう）』を代表とする漢詩文的な教養です。ここでは平安朝的な漢詩文愛好の典型として『和漢朗詠集』を紹介しました。『源氏』にも多大な影響をもたらした「長恨歌」や「琵琶行」等、白楽天の詩文が当時の宮廷人の間でいかに嗜好されたかを、この本から類推することが可能でしょう。

『源氏』創出にあたって、これらの作品が大いに刺激を与えたということはもちろんですが、それ以上に重要なのは、読書行為においてこれらメジャーな先行作品の筋立てを、読者は想起せずにはいられなかったであろうという事実です。『源氏物語』の作者も、またそれを享受した読者も、こういう知的環境に置かれていたということを、認識したうえで『源氏』の世界をとらえ返してみてください。

一方、『源氏物語』以後の作品については、その影響はどうでしょうか。ここに紹介した『狭衣物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『松浦宮物語』などの作品を見ると、これはもう「影響」などという言葉では言い足りない、むしろ「呪縛」と言って良いほどに、『源氏』的色彩の支配下に置かれた感があります。

物語作品以外の、例えば菅原孝標女の『更級日記』——ちなみに、この日記作者こそ上記『浜松中納言』『夜の寝覚』二作品の作者でもあると、藤原定家がこの本の奥書に注記していることは有名——や、我が国最古の文芸評論書として名高い『無名草子』などを見ても、これらの作品がいかに『源氏』マニアの手に成ったものかということが、はっきりとうかがえましょう。それほどに『源氏物語』の磁力は強烈だったのだ、と言えます。

和歌の世界においてもそれは同様で、『新古今和歌集』の歌々にも『源氏物語』の影響は明らかに見て取れます。ただ和歌の場合、プロットや登場人物のキャラクターなどに類似が臭ってしまう物語作品とは異なり、三十一文字（みそひともじ）の奥に『源氏』的雰囲気や影を彷彿とさせることで、いわゆる「余情妖艶」という独特の、新しい和歌の世界を現出させることに成功していると言えましょう。

このほか、謡曲や歌舞伎等の演劇の世界にも、『源氏物語』の影響の色濃い作品がありますが、今回の展示では割愛しました。

G ヴィジュアル版『源氏物語』

古く高貴な人々は、声の佳い侍女たちに物語本文を読ませ、自分はその場面を描いた絵を見ながら、作品鑑賞したと言われていました。音楽のように快い高低・強弱をつけられて、耳から流れ込んでくる音声言語による聴覚的刺激と、絵画を見ることによる視覚的な刺激とが融合して、眼前の静止画像が生きて動き出すかのような幻想が、聴き手の脳裡に沸き上がってくる——なんとも贅沢な物語の鑑賞方法だったのではないのでしょうか。

ここではそんなヴィジュアル作品の例として、『源氏物語絵巻』をはじめ、様々な絵巻類を紹介しています。多くの絵画は、「大和絵（やまとえ）」と称される極彩色——残念ながら現在では、損傷・変色が著しいけれど——の華麗なものですが、『枕草子絵詞』などは「白描（はくびょう）」と言われる精緻な墨書き。シンプルだけに、かえって優美な味わいを感じさせて秀逸です。

H 『源氏物語』の土壌

『源氏物語』の成立は1010年前後とされています。平安中期、一条天皇の治世でした。どうして他でもないこの時代に、このような作品が書かれたのでしょうか。この一大長編作品の成立の背景として、一条朝というこの時代を考えてみましょう。

『源氏物語』の初発は、おそらく若紫巻や夕顔巻周辺の内容に相当する短編だったとされています。それが時の左大臣 藤原道長の知るところとなり、作者はその文才をかわれて、道長の娘で一条天皇の中宮であった彰子の後宮に、侍女——「女房」と言いますが——として雇いあげられたと考えられています。「紫式部」というのは、その際につけられた通称で、もちろん本名ではありません。道長は彰子の後宮を華やがせるべく、女流歌人として名高い和泉式部・小式部内侍や伊勢大輔、大式三位、赤染衛門——赤染は、正確には彰子の母に仕えた女房——など多くの才女を集めました。紫式部はその旗頭であって、言わば『源氏物語』は道長・彰子ブランドの看板商品だったわけです。『源氏』は道長の絶大なる権勢の後ろ盾を得て、現在のような長編作品となり得ました。当時、紙はたいへんに貴重で高価だったので、作者がいかに文才にあふれていたとしても、強大な経済的支援がなければこのように長編化することはとうてい無理だったでしょう。

当時、優れた女房を雇っていることは、一種のステータスでした。彼としては、彰子後宮の文化的レベルを向上させたかったわけです。道長の思惑では、『源氏物語』とその作者が評判を呼べば、多くの風流人士が彰子後宮に集まってくる。するとそこに高度に文化的なサークルができあがる。それがさらに人々の注目を浴びて、風流の噂はますます高まる。その華やぎは、結果として帝の興味をも惹きつけ、わが娘が寵愛を集めることになるというわけです。

道長がこういうことを考えたのには、彰子より先に一条天皇の中宮として時めいていた、定子後宮の存在があったことは想像に難くありません。言わずと知れた『枕草子』の作者 清少納言の仕えた女主人です。この後宮は、才気煥発で陽気な気質に恵まれた女主人の影響もあって、華やかな活気にあふれており、風流好きの貴公子の人気を博していたと言います。帝の寵愛をも一身に集める様子は、『枕草子』のみならず『栄花物語』の中にも描かれていて、定子が一男二女を遺して早世した後も、他の女御たちには永く次の皇子誕生がありませんでした。

一日も早く彰子に男御子の誕生を——そしてその皇子の来るべき即位を——願う道長にとって、学問・芸術の好きな帝の興味を惹きつける後宮の創出が、重要な課題であったと思われます。定子後宮における『枕草子』に匹敵する文化的達成として、『源氏物語』をはじめ、

『和泉式部日記』などの作品や、この家に仕える多くの女房歌人の支援に努めたのではないのでしょうか。

結果として、彰子には後一条・御朱雀という二人の帝が生まれ、「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」という詠歌にもうかがえる絶大な権勢が、道長の手握られることになるという事情については『栄花物語』や『大鏡』に詳しく見えます。『源氏物語』という大輪の花は、こういう藤原摂関政治の土壌に根ざしているということを知ると、物語世界がいつそう奥行深く感じられるでしょう。

